

旭川で見つけた 外来種 外来生物

Alien creature

自然分布域（その生物が本来有する能力で移動できる範囲により定まる地域）の外に生育又は生息する生物種を、「外来種」（がいらいしゅ）といいます。中でも、海外からわが国に入り生息する生物種が「外来生物」です。外来生物には、生態系への被害・人の生命や身体への被害・農林水産業への被害などの被害をもたらすものもあります。自然共生ネットワーク各団体が「外来種・外来生物」について報告します。

vol.20 特集

大雪と石狩の自然を守る会 より報告 【セイヨウの取り組みからみた外来種問題の課題】

外来生物法が施行（2005年6月）される一月前、外来生物セイヨウオオマルハナバチの取り組みを始めました。東京大学保全生態学研究室が進める大雪山とその周辺の調査（モニタリング）に協力することからはじまり、突哨山や石狩川河川敷における定点観察、東川・美瑛・上富良野における監視活動、大雪山につながる主要道路の花資源調査の実施、市民啓発の学習会や講演会、報告会などとして現在に至っています。2006年8月に黒岳9合目のお花畑でセイヨウの侵入を確認（国立公園における初確認）してからは、その深刻な事態に対処するため翌月に「大雪山マルハナバチ市民ネットワーク」を立ち上げ、さらにこの問題に取り組む市内・近郊の市民団体（5団体）に上川支庁（当時）・旭川市・環境省自然保護事務所（当時）を加えて、「セイヨウ連絡会」を結成（2007年5月）しました。



日の出公園監視活動から

セイヨウの発生源としては、一定の割合で栽培ハウスから野外へ逃げ出しているものと、すでに野外で定着し自然巣を形成して野生化しているもの双方が挙げられます。発生源対策を講じるとともに、防除活動を進めて侵入地域の生息密度を下げる取り組み、さらにはいったん生態系に入り込んだ外来種の排除は容易でないことから、侵入させない地域をどう確保していくかが重要です。広大な高山帯とそこに広がるお花畑を持つ大雪山国立公園は、きしあたり最重要なエリアで現在の大きな目標になっています。生態系における在来種と外来種の係わりは、交雑を含めて複雑であり、単純に外来種を敵視するだけでは問題は解決しません。侵略的とされる外来種の「特性や定着・分布拡大のメカニズムを明らかにする」とともに、それらが「生態系に与える影響の予測」が必要です。

これらの研究課題に加えて、多くの市民が外来種問題に関心をもち防除活動へ参加すること、大局に立った行政の積極的な関与が必要で、この協働をいかに作りあげるかが今後の課題になるのではないのでしょうか。

旭川外来植物研究会 より報告 【旭川地方の外来植物】

旭川外来植物研究会は毎月1回（4月～10月）植物調査（外来種、在来種、木本植物）を実施しています。拠点は春光台公園です。外来植物が年々増加しています（今年度は指定外来種のイワミツバ・フイリイワミツバを新確認しています）。

現在、旭川地方には243種の外来植物を確認しておりますが、春光台公園にも多くの外来植物があります。特に特定外来種のオオハンゴンソウが群落を形成しています。その他の活動として、外来植物の駆除を実施しています。春光台公園ではオオハンゴンソウ、突哨山ではオオハンゴンソウ・フランスギク・オオアワダチソウ・ヒメジョオンを引き抜き作業と切り取りを実施しています。外来植物と在来生物（草木及び林）の調査を実施し、外来植物が生態系に与える影響等を研究しています。

突哨山では、オオハンゴンソウ・フランスギクともに駆除のため減っているように見えますが、どちらも地中に種子や根茎が残っている場合があり、それらがある限り減ってはいないのです。

NPOもりねっと北海道 より報告 【強くても弱い？外来生物】

NPOもりねっと北海道が指定管理をしている突哨山でも、オオハンゴンソウやフランスギク、アライグマなどの外来生物がかなり入り込んでいます。でも、よく見ると、街中であれほど目立つセイヨウタンポポも森の遊歩道ではほんの少し。オオハンゴンソウは抜き取りを続けたことで、公園内では大きな群落はなくなりました。アライグマは健在ですが、在来のキツネやタヌキもしっかり生き抜いています。

外来種といえども、オールマイティーに強いのではなく、周囲の明るさや土質、水分など、好みの環境で爆発的に増えるのでしょう。生物界のバランスは本当に微妙だなと感じます。



①突哨山遊歩道での外来植物の除去活動。運営協議会委員やボランティアがオオハンゴンソウやフランスギクを抜き取る②突哨山・扇の沢に現れたタヌキ。数は少ないがしっかり生き抜いている③突哨山近くの林道に現れたアライグマの一家。タヌキより大柄で手も器用なので増える傾向にある

NPO 法人 癒しの森づくり より報告 【危険な外来種「アメリカオニアザミ」】

ここ10数年、前より、身近で見かけるようになりました。生態系被害防止外来種で特定外来生物ではないのですが、幅広く生態系等に被害を及ぼします。

長さ1cmから2cmのトゲが無数にあり、鹿や馬の家畜も食べず、酪農地帯では放牧地の害草として被害も出ています。

また、野生のシカでさえ食べず、知床などでは自然



オニアザミの花

環境も破壊にも悪影響を及ぼしています。

日本で確認されたのはわずか60年くらい前と言われて、でも、もうすでに北海道の自分達の生活圏内に進出してきてます。特に北海道に多いようです

仕事柄、個人宅の庭管理、広場の草刈り等の作業をしているのですが、危険で迷惑な植物の一種といえます。公園や、空地、空家の庭に多く、子供たちにも危険です。

早く特定外来生物に認定し、スピーディーに強力な手段を講じなければSDGsにも関係してくると思います。

花はきれいで花粉症に対する影響も少なく、問題は無いのですがアメリカオニアザミの強力なトゲが危険なのです。生えている時も危険ですが、枯れると固くなりもっと厄介で、普通の手袋ではだめです。



①若葉 ②咲き終わりとトゲ凄

従来のアザミと言えば、春の山菜ですが、アメリカオニアザミ、食用としても適さないようです。

一般の市民にも知ってもらい、見つけ次第、駆除する告知が必要です。

大雪山マルハナバチ市民ネットワーク より報告 【特定外来生物「セイヨウオオマルハナバチ」の防除】

黄色と黒のストライプ・お尻が白い丸くて毛深い蜂がお庭に飛来していませんか？春先、越冬から目覚めた女王蜂が営巣のために「巣探し行動」を始めます。巣は土の中（ネズミの巣跡を利用）や壁と工作物の間に造ります。物置や縁の下の換気口から出入りする事もあります。

温室トマトの受粉に利用するためヨーロッパから輸入された「セイヨウオオマルハナバチ」が、トマトハウスから逃げ出し、野生化して市中や山野を飛び回っています。在来のマルハナバチとの交雑や巣の乗っ取りなど来来マルハナバチの生態系を脅かす存在になりつつあります。

環境省はセイヨウオオマルハナバチを『特定外来生物』に指定し、その拡散を防止しようとしています。農業利用や研究目的等で環境省の許可を得たものを除き、輸入、販売飼養等（飼育・栽培・保管・運搬）が禁止されています。特定外来生物法に違反すれば、違反内容にもよりますが重い違反であれば、個人の場合は3年以下の懲役もしくは300万円以下の罰金（場合によっては懲役刑と罰金刑の両方）、法人の場合は、1億円以下の罰金が科せられます。



上富良野町日の出公園での防除活動

大雪山のお花畑の花たちは特定の在来マルハナバチと共生関係にあります。大雪山のお花畑や在来のマルハナバチ類を将来に向け存続させていくためにもセイヨウオオマルハナバチの防除が必要です。

セイヨウオオマルハナバチの防除活動（素手で掴んだりしなければ刺される心配はありません）へご協力ください！

セイヨウってどんなハチ？

●セイヨウオオマルハナバチは、ミツバチの仲間バチです。現在、法律により侵略的外来種に指定されています。

●在来種にくらべ体が大きく、強い競争力を持っています。在来種とエサや巣で競合し、コロニーに侵入すると、女王バチを刺殺して巣を乗っ取り、在来種を駆逐します。

●温室トマトの受粉に利用するため、人工増殖されたコロニーがベルギーやオランダから、1992年より本格導入されました。ハウスから逃げ出したものが野生化し、全国で分布を広げています。

●マルハナバチと花は、エサと受粉を通して命を紡ぎ合う特異な関係を保っています。在来種の排除が進むとその関係が根底から崩れ、それらの植物に大きな影響を与えると心配されています。

嵐山ビジターセンター より報告 【外来種 アズマヒキガエル駆除作戦】

春先水たまりから、柔らかなピュロピュロピュロというエゾアカガエルの鳴き声が聞こえてきます。楽しみにしていたこの鳴き声がいつの間にか聞こえなくなりました。そしてこれまで見たことのない大きなカエル、国内外来種アズマヒキガエルの姿を見ることがになりました。この外来種の影響ではないだろうか？と、2014年の春から嵐山ビジターセンター駆除隊の活動が始まりました。

駆除隊は呼びかけに応じたお母さんと子供たち、それと少しのお父さん。それから毎年、夕方から夜9時頃まで、ビジターセンター前を流れるオサラツベ川沿いの歩道わきの水溜りや懐中電灯を武器にアズマヒキガエルを見つけ次第、手づかみでバケツに放り込んで歩きます。子供たちは先を争って探し、お父さんはじっくり探



①アズマヒキガエル駆除隊②③駐車場で見つかった大量の死体④メスを待つアズマヒキガエルのオス⑤集合性のあるオタマジャクシ（再開の森）⑥細いひも状の卵塊（駐車場）⑦ビジターセンター前の水溜り

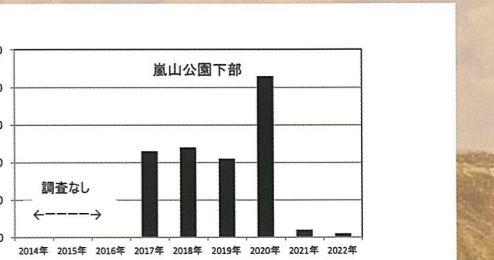
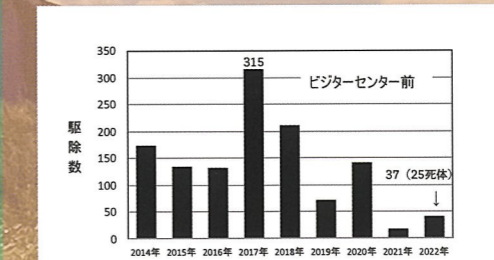
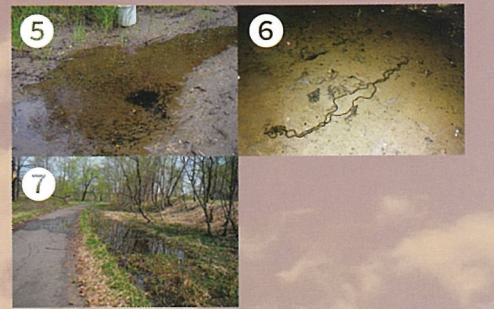
し、お母さんたちは楽しそうにおしゃべりしながらついて行きます。こうして、4月下旬から6月初旬の間に毎年4回から16回駆除活動が続け9年目になりました。駆除を行った場所はビジターセンター前の歩道700メートル区間の水溜りを中心に、嵐山公園下部、再会の森、出羽家の池の4箇所です。ビジターセンター前の区間では、駆除活動の結果ははようになったか？図を見てください。2017年の315匹が最も駆除数が多く、2018年から減り始め2021年に18匹になり、昨年、2022年の駆除数は37匹ですがそのうち25匹は死体が見つかりました。

死体は2020年から少し見つかっていたのですが、こんなに大量にしかも河川敷の駐車場の水溜り1カ所で見つかり驚きました。犯人はアライグマです。北大の岸田先生にも確かめました。そして、エゾアカガエルの鳴き声が聞こえなくなったこともやはりアズマヒキガエルが原因でした。アズマヒキガエルの毒のあるオタマジャクシをエゾアカガエルのオタマジャクシが食べることで死ぬことが岸田先生の実験と野外調査で明らかに

なりました。エゾアカガエル、エゾサンショウウオが減ったのはアライグマの捕食の可能性もあります。

本当に減ったのかどうかは、捕獲作業が駆除した夜中に出没する可能性もあり、もう少しばらばら駆除活動を続ける必要があります。しかし、嵐山公園下部でも減少、卵塊が見つからなくなった、以前は附近の住宅地を徘徊していた個体も見えなくなった、中・大型個体ばかりで幼体が見つからないことから、やはり減っているようです。原因は駆除活動の成果、アライグマによる捕食、降水量の変化や宅地開発による環境（水溜り）の変化、感染症や不明の原因などが考えられます。

30年ほど前、埼玉県から持ち込まれ神居古澤近くの池に放されたアズマヒキガエルは石狩川の下流へ分布を広げ、すでに石狩地方まで到達しています。忠別



アズマヒキガエル駆除の経過